《書　評》

栗原　浩著『風土と環境――その視座のちがいから農耕を考える』

杉　村　和　彦*

1

農業と農学の乖離が叫ばれて久しい。とりわけ農村の現場を歩きながら感じる農民と農学の乖離は，風土を身体で知っている栽培者と風土について日々関心が薄らいでいる研究者の農業現象の理解の間にある溝として，今後の農業・農村のあり方に対して極めてペシミスティックな危機意識を抱かせる。農学栄えて農業滅ぶということだけでなく，バイオテクノロジーなどへの傾斜の中で，今や栄える農学がいわば一つのイデオロギーとして，そこにおさまり切らないふくらみのある農民の知のあり方をさいなんでいるのではないかという思いにとらわれる。

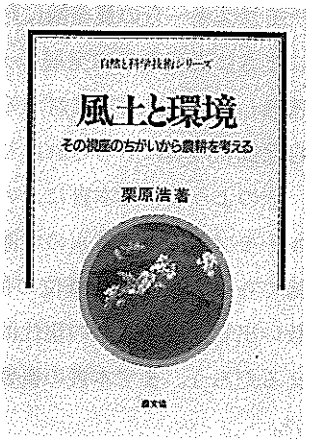
著者はこのような問題の解決の道の一端を自らの作物学者としての研究経歴を踏まえながら〈耕地的自然についての風土的認識〉の再生という方向の中に求める。その問いの中には，農村の現場を歩きながら，著者がかみしめてきた農学をめぐる以下のような思いがこめられている。

「もともと科学技術の研究に徹してきた私であったが，一見科学的である技術が，耕地生態系の破壊を招来している現実を見たとき，より広い，長い空間的，経時的自然を知ることの重要性，科学的認識をも包摂し，位置づけるような風土的認識の必要性に気づいたのである。」

本書『風土と環境――その視座のちがいから農耕を考える』で語られている

*すぎむら　かずひこ，京都大学大学院農学研究科

ことは，“作物学”という一つの扉から見た農学の現在，すなわち自然科学的であることを志向し，ひたすら机上と実験室の中でとぎすませてきた自らの分析的視角にだけ依拠し安住する，現代農学の批判にほからない。客観主義の名のもとに現代農学が切り捨ててきた，しかし今なお現場で作物を育てるものにとっては馴染みの深い，“風土”という言葉を巧みに手操り寄せそこに息を吹き込むことによって，本書は自然を克服し支配するのではなく，自然と和解し共生する技術学としてのもう一つの近代農学の道の可能性を専門を越えたより広い視角のなかで語りかけている。



2

農業をいかなる現象と理解するかということに関しては，これまでも様々な視点，諸説が存在するが，これを自然と人間の関係性という視点からとらえるとき大別してさしあたり以下のような自然優位に立つ考え方と人間優位に立つ考え方の二つの立場が存在する。前者の視点はドイツにおいて農学原論を著わしたクルチモフスキーに代表される「農業は単に営業であるばかりでなく，同時にまた一つの自然現象である。すなわち人間と栽培植物および家畜との共生であるとみることができる」という考え方である。この視点は日本においてはとくに農業生態学的視点にたって研究を進めてきた盛永俊太郎などによって引き受けられてきた。これに対して後者の人間優位に立つ考え方の典型的な例は，「農業は人間の目的的営為であり，決して単なる“在る”自然ではない」としてクルチモフスキー，盛永を批判して日本において独自の農学原論を著した柏祐賢の考え方に見られるものであろう。

この柏の視角は，“農業の不断の発展”をとらえることを論理の中核におき，自然に対する“人間の能動性”を強調するものであり，高度経済成長期を貫く，

“産業”としての農業観をささえる視角としてこれまでどちらかというとクルチモフスキーらの農業観に対して優位を保ってきた。しかし今日近代化のはてにまさに近代農学の発展ゆえにもたらされた,「崩壊する自然」という現象に遭遇しながら，自然に対する“人間の能動性”の意味とその根拠があらためて自己批判の場にさらされはじめている。

そのような中で本書において“自然との共生”を志向する著者の視角は，クルチモフスキー・盛永の学派の流れに立つものとして，近代農学によって切り捨てられてきた自然優位の視座を“風土”“風土的認識”という言葉に託して救い出し，その農学の現代的な再構成の作業の一つの試みをなしているともいえるだろう。まず本書の概要を以下において各章ごとに簡単に説明しておきたい。

第1章「風土と環境」では，農業技術における「風土的認識」とは何かということが，自然の認識における分析的，科学主義的な視点にたつ,「環境的認識」との対比で論じられる。

ここで風土とは栗原氏によれば,「人間を含む動植物と大気，大地の作る自然現象との共同によって作られた総体的な土地の様子」である。そして風土的認識とは農業を総体的な生き物として考える論理，すなわち生きている作物，家畜が対応し，生きている人間の生命がかかわり，これらが生態的均衡系として形づくられるものとしてとらえていくことであるとされる。ここで風土的認識の担い手は栽培しつづける農民であり，風土的認識とはまたその農民の経験知のあり方の特質でもあると説明される。

これに対して近年の作物研究においては，作物と環境との関係を探究する際に環境を様々な要素，例えば風や気温，湿度などの気象的要因，土壌組成，土壌構造などの立地土壌的要因に分けた上でその要因，要素と作物との関係を結びつける思考が支配的になっていると著者はとらえる。このような視点は，土地にふれることのない研究者の抽象的な認識であると批判するとともに，近年の農学研究が局部的な現象ばかりを探り，環境が作物の主体的な行動にとってどうかかわるのかという視野を欠如させて，研究者の視点はますます農民の認

識と異なったものになってきていると著者は批判する。

第2章「風土を映し出す作物の〈かたち〉」では，以上のような風土と作物の関係が，風土の表現体としての作物の「かたち」，とりわけ栗原氏の研究上における専門分野でもある作物の「植物単位」のかたちと風土の関係として説明される。

このような作物の〈かたち〉とは，著者においては一生を貫く総体と，ある時期やある期間などの部分との関係性によって成り立っているものと考えられる。とくに本章において詳細に論じられている「植物単位」は，そのような「かたち」の最小単位であり頂部から基部にむけて葉身，葉柄，節間，芽，節，および根から構成されており，著者は植物の成長とはさしあたりこの「植物単位」が基部から上方に積み重ねられていく過程と考えている。

そしてこのような「植物単位」の連鎖として作物の「かたち」を認識していくプロセスは，農民の認識過程とつながるものがあると指摘し，特定の作物に専念している人達は，このような作物の〈かたち〉（それは風土に対する生態反応の結果であるが）から，その適応幅を知り，段階に応じて生育を調整する方法を生み出していくことを説明している。

それとともに本章においては，作物の存在は，その〈かたち〉において，空間的諸条件の経歴性を引き継ぐとともに，未来に向けての方向性を含み，終局の種族保存の〈たねもの〉へ向けての自己運動を続けているものととらえられ，「作物の主体性」の根拠とされる。そしてこの視点から〈たねもの〉の多様なあり方と作物体の構造の関連，そのかたちの規則性と経歴性が，イネ，トウモロコシ，ジャガイモ，サツマイモなどの具体的な事例を通して説明されている。

第3章，第4章では，このように風土とともに，そこに主体的に生きている作物のあり方，そのかたちが，コンニャクの自然生畑，砂丘地農業のあり方を通して説明される。

第3章におけるコンニャクの自然生栽培とは，年生の異なる個体をごちゃごちゃに混植して，年生の進んだ個体のみ適宜収穫・出荷販売に供するもので，一般のコンニャクの栽培が連作障害に悩まされているのに対して，自然生の畑

においては，百年連続栽培しても障害がおこらないということを発見して驚く。しかしよりたちいってコンニャクの自然生畑を観察すると，同じ場所で，同じ方式でやっていても生育状況に大きな差異があり，この章を通してコンニャクに適合的な“風土”を，著者は福島県，茨城県，東京都西多摩，山梨県，長野県など全国を歩きながら検討している。

そしてその結果として著者は，自然生畑に適した風土は“類似する”という確信を得ている。しかしその意味することは，その場所の気象や土壌がどれもこれも一致するということではなく，それぞれの環境要素に多少の差異があっても，これらの要因が渾然として総合された総体，すなわち“風土”はかなり類似しているものだと著者は述べる。

第4章においては，鳥取県の砂丘農業におけるタバコやスイカの間作ムギ，防雪用にそえられた経木材，砂防のためのわらの利用などを事例として有機物利用にみる風土認識が説明される。

例えばタバコ作に間作されるムギは，防風のためでもあり，保温のためでもあり，虫よけのためでもあり，敷きわらになり，有機物の給源になり，微生物のえさになり，肥料になり，多目的な機能が存在することを著者は指摘する。

この意味するところは自然物を使ったこれらの技法は，風を防ぐ，虫を避ける，霜から守る，植え床をつくるといった単一の目的を合理化する現代技術と違って，その機能が総合化されて意味をもつという特質がある。そしてこのような風土的技術は，砂丘地などの限界地農業の中で，とりわけ大きな意味をもってくることが事例研究を通して説明されている。

第5章においては，以上のような著者の農業の風土論的理解を踏まえて，独自の技術論が語られ，現代農業の再生に向けての具体的な提言がなされる。著者は農業技術を二つに分ける。一つは著者が「汎技術」と呼ぶもので，また労働手段や経営判断がどのように変わろうとも，作物と耕地生態系の間にみられる合則性をとらえ，それを意識的に仕組むもので，このなかには，作目選択や作付け体系，品種選択などの技術が含まれる。

これに対して著者は，個々の作物と関連したものを「個別技術」と呼び，そ

の中には各作物の栽培密度や仕立て方，施肥などの体系の根幹に関わるものや，耕起や管理，病虫害防除などの作物の管理技術が含まれる。

現状の生産現場では作物の選択や作期などは，経営採算を前提に決められる場合が多く栽培の前提として据えられるべき風土は軽視ないし無視されがちであるが，ここで著者は「汎技術」が一つの「生産力」として大きく関わる例を示しながら，個別技術よりも汎技術を重視する農業技術の考え方の重要性を強調している。

3

以上が本書の第1章から第5章の概要である。すでに述べたように本書においては著者の“風土”“風土的認識”という視角が一貫して農学の研究視点との連関で描かれ，すぐれた現代農学の批判の書となっている。この“風土的認識”という視角の中で，とりわけ作物学者としての著者の力量と説得力を示しているものは第2章の「風土を映し出す作物の〈かたち〉」とそれとの関連で事例研究が示されている第3章，第4章であろう。

評者は作物学にはおよそ門外漢であるので，すでに要約して述べたような著者が力説する「植物単位」の考え方やその視点が，作物学の学問内部の論争視点としてどのように重要なのかをここで論ずることはできない。

しかし本書を読みながら興味深く感じることは，農学において植物の要素をばらばらに考察する要素還元的な見方を越えようとする著者の視点と，ドイツを中心として今日再評価されつつあるゲーテの科学論，とりわけその〈形態学〉の視点が，「植物単位」のかたちと生成，そのメタモルフォーゼへの着目，さらには作物に主体性を認め，その主体性が「植物単位」のかたちにあらわれるとするという点においてつながってくることだ。そしてここにはさしあたり，二人の視角に共通するものとして，近代の力学的自然観が自然を無機的な機械と見なし，自然からその生命を奪い取ってしまったことに対する強烈な批判が存在する。

それとともにゲーテは，近代の多くの自然科学者のように，自然を客体化，

対象化するのではなく，自然と相和し自然と自己同一化する視点から自然をとらえるという点で，近代科学の基礎をなしたデカルト以来の二元論を越えるものとして注目されているが，著者が本書で繰り返し述べている“風土的認識”の立場は，科学史の中でゲーテが位置した二元論を越えることを志向する立場を暗黙のうちに前提とするものともいえるだろう。

このように本書は現代農学への批判の書として，その根幹をゆさぶる，すぐれた着想に支えられているが，しかし一つの疑問が残る。それはここで著者の視角と重なるゲーテが極めて強靭な「見る」人ではあっても，どこまでも「作る人」「育てる人」ではなかったということ，自然のすぐれた観察者ではあっても自然の中での生活者ではなかったということとつながる問題である。

確かに“風土”“風土的認識”を語る著者の語り口のなかには，作物学の中に一生をかけ，そこから“世界”を見通そうとする人のまぎれもない経験知が存在する。しかし今われわれが，農業の“風土性”を語り，その視座から農業の再生を考えていこうとするとき，「見る」ことを通して一義的に“風土性”を語る“作物学者”の目をそのまま農民の目とすることで“風土的認識”を基礎におく新たな“農学”は出発することになるのであろうか。

例えば現状の生産現場のなかで作物の選択や作期などが目先の利益や経営採算によって決められることに対して，著者が“風土”を仕組むような，長期的な視点をもった，栽培技術の必要性を強調することはよく理解できる。しかし今や主体性を奪われた農民の存立状況をよりたちいってとらえることなしに，いくら風土のなかで生きる作物の“主体性”を見極めることを強調しても，「技術」を最終的に担っていかなければならない農民にとってはお仕着せのものになり，結局のところ，そこからは“風土”の思想を上から押しつけるだけの，“農民”不在の技術論しか浮び上がってこないのではないだろうか。

それとともに“作物”を見る農民の目は，どこまでも作物を活かし利用する生活者の目であり，そこに生き抜くものの知恵としての文化や世界観を媒介として技術を構想していく。このような視点から見たとき著者の“技術論”の中には，とぎすまされた「見る」ものとしての作物学者の“風土的認識”はあら

われていても，今のところ「作り」「育てる」ものとしての農民がとらえる風土観，農民自身の風土的認識といったものが，“技術”を構想する際に，著者の視点からすっぽりと抜け落ちているのではないかという気がするのである。

農民の目に自らの目を近づけて「見る」という，著者の地平を一歩越えて，「行為」の人としての農民のこころを新たな風土論的農学の「こころ」とする，そのような「共生の時代」にふさわしい農学の再出発は不可能なのであろうか。

4

ともあれ本書は，現代技術と科学の行き詰まりの中で，自然と人間の共生の場を求めて思考する多くの研究者，農業者にとって，学問領域を越えて一気に読ませ共鳴させる魅力を有している。

本書をひもとき読み続けるうちに，“風土”という言葉への一作物学者のこだわりと思いを通して，かつて現代科学によってほうむりさられようとした言葉がわれわれに身近なものとして，“知”の営みの中に蘇えってくる。そして著者とともに“風土”と“環境”という言葉のちがいを考え続けているうちに，いつの間にか“死にいたる病”におかされた現代の農業・農村に思いを馳せている。

風土という言葉にふさわしい「農耕」と，環境という言葉にとらわれた産業としての「農業」の間には農学の新たな出発のために，もう一度その相違点を確認しておかなければならない深い溝がある。そしてその違いを問いただす学問的営為のなかにもう一つの世界が見えてくる。

そのような意味で本書は，農業と農学の新たな結合の可能性を希求する人に必ずや有益な示唆を与えてくれると思われる。一読をお薦めしたい。

（1988年，農山漁村文化協会，1300円）

参考文献

津野　幸人　1975『農学の思想』農山漁村文化協会.

高橋　義人　1988『形態と象徴――ゲーテと「緑の自然科学」』岩波書店.